

「横作品における散らし構成と墨の扱い」についての一考察

高木 厚人

TAKAGI Atsuhito

日展作品についてはこのところずっと横作品（70×225cm）を書いている。散らし構成、墨の扱い等については計算しながら書くことはなく、いつもは感覚的に調整しながら書いているのだが、ここでは近三年間の作品を取り上げ改めて分析してみたい。

第三集団 三行 墨入れ 三行目

C作品（2021日展作品）

散らし 三集団 31文字 33文字 13文字

第一集団 七行 墨入れ 四行目

第二集団 八行 墨入れ 二、六、八行目

第三集団 五行 墨入れ 無し

A作品（2019日展作品）

散らし 三集団 28文字 33文字 14文字

第一集団 五行 墨入れ 四行目

第二集団 八行 墨入れ 一、四、七行目

第三集団 三行 墨入れ 二行目

B作品（2020日展作品）

散らし 三集団 31文字 35文字 12文字

第一集団 八行 墨入れ 四、七行目

第二集団 九行 墨入れ 二、五、八行目

※いずれの作品も西行の歌を三首、素材として取り上げ、感覚に頼ってまどめ上げたものだが、構成等を比べてみるといくつかの共通点が見られる。以下、書き上げてみたい。

(1) 三集団のはじめの第一集団は、A、B、C作品いずれも和歌一首となっており、渴筆で書きはじめている。

(2) 第二集団一行目行頭は渴筆で描き始めている。

(3) 第二集団を構成する行の内、二行が行頭から行脚まで墨が入

っている。

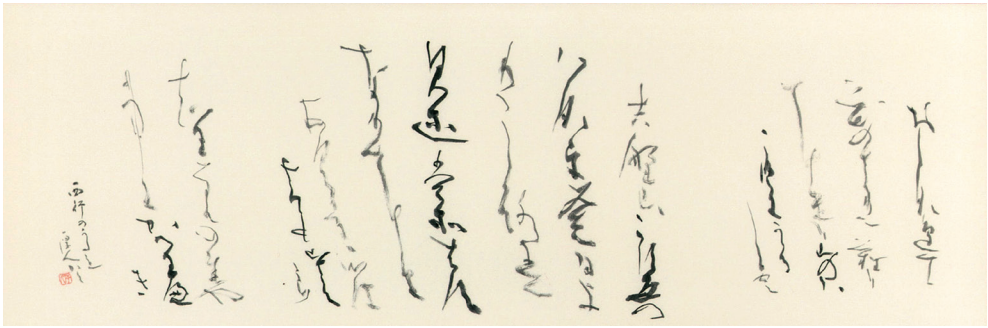
(4) 第二集団最後の二行は文字が小さくなっている。

(5) 作品の中心、山場は、第二集団の、墨を入れた行の次の行からの四行となっている。

(6) 第三集団は行が進むごとに文字が小さくなっている。

※作品は構成、墨の扱いだけでなく書を支える線そのものの力が大きく影響するものである。今回は自身が日頃書いている作品のあり方を検証してみたが、もっと別な要素からもA、B、C作品の共通点を見い出せるのではないかと思う。時間を置いて改めて考えてみたい。

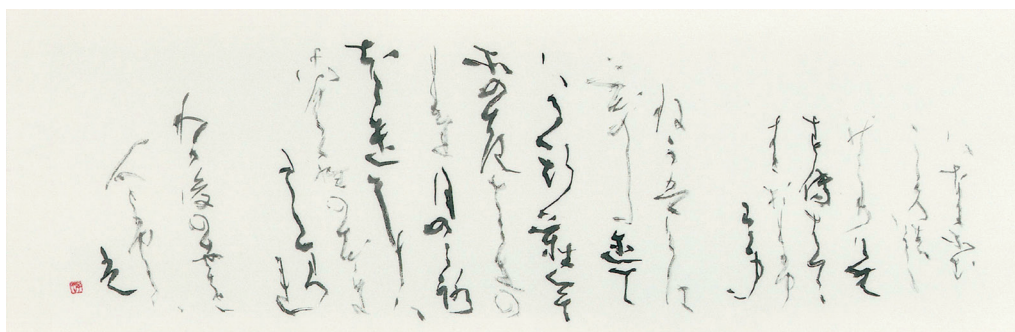
A



70cm × 225cm

おしなべて花のさかりになりけり山のはごとにかゝるしら雲
吉野山こず糸のはなをみし日よりこゝろはみにもそはずなりにき
あくがるゝ心はさても山ざくらちりなむのちやみにかへるべき
西行 『山家心中集』 7・8・9

B

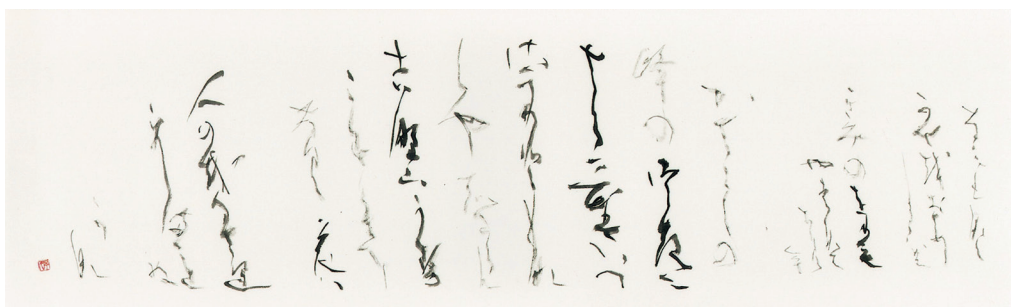


70cm×215cm

はなにそむこゝろのいかてのこりけむすてはて、きとおもふわが身に
ねがはくは花のしたにて春しなむそのきさらぎのもち月のころ
ほとけにはさくらの花をたてまつれわが後の世を人とぶらはば

西行 『山家心中集』 10・11・12

C



70cm × 211cm

なみもなくかぜをおさめししらかはのきみのをりもやはなはちりけむ
かざごしの峰のつききにさく花はいつさかりともなくやちるらむ
吉野山かぜこすくきにさく花は人のをるさへをしまれぬかな
西行『山家心中集』 14・15・16